

今月のみことば 2019年3月

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

(ローマ人への手紙10章9, 10節)

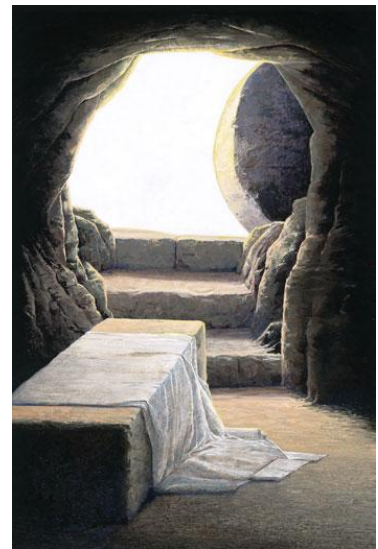
歴史的事実としてのイエスの復活

新約聖書は、ある意味で非常に変わった書物である。

例えば、四福音書はイエスの公生涯を記録したものであるとはいえ、十字架、復活に関わる最後の一週間に割く紙面が飛び抜けて多い。マタイ36%、マルコ38%、ルカ25%、ヨハネ38%と言った具合である。新約聖書全体を見渡しても、十字架と復活がメッセージの中心であることは顕著であり、それらを抜いてしまえば、インパクトを失ってしまうほどである。

さらに不思議なのは、「十字架と復活」というメッセージが、最も信じがたいものであったばかりでなく、最も受け入れがたいものであった、ということである。

いまでこそ、十字架は美しいシンボルのように思われているが、新約聖書の時代は、人間の尊厳をすべて剥ぎ取る残酷な処刑道具であった。そのような十字架で死んだ名もない男をメシア(キリスト)、つまり救い主と信じる、というのは当時の人びとには正気の沙汰とは思われなかったことであろう。そればかりではなく、その男が三日後に復活した、というのである。これほど信じにくい宗教がいまだかつてあったのだろうか。

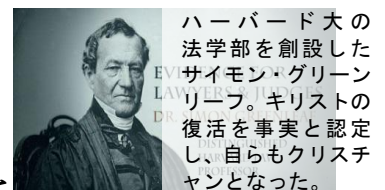


それに加え、イエスをキリストと信じる者には過酷な運命が待っていた。ユダヤ人社会からの追放、そしてローマ帝国による血も涙もない迫害である。特にネロ帝による迫害は常軌を逸したものであったことが知られている。自分に得になることがなにもひとつないのに、なぜ膨大な数の人びとがキリストを信じたのであろうか。

その理由のひとつは、キリストの復活が疑い得ない事実であると、キリスト者たちが認識したからである。

歴史家のほとんどは次の四つを認めている。

- (1) イエスが十字架で死に、葬られたこと
- (2) イエスの墓は空であり、遺体はどこをさがしても見つからなかったこと
- (3) イエスの弟子たちはこぞってよみがえったイエスを見た、と証言したこと
- (4) 弟子たちは迫害や殉教をも恐れず、イエスを救い主として宣べ伝えたこと



ハーバード大学の法学部を創設したサイモン・グリーンリーフ。キリストの復活を事実と認定し、自らもクリスチャンとなった。

以上のことを、四福音書および『使徒の働き』は詳細に記録している。特筆すべきは、イエスの処刑を背後で扇動したユダヤ人議会も、後に迫害者となるローマ帝国も、キリストの復活を否定した痕跡がどこにもないことである。ローマ史の権威、弓削達氏はその主著のひとつ『ローマ帝国とキリスト教』の中で、歴史的な事実と認定できるかどうかの条件についてこう記している。「ある事実を事実として認めることが不利であるような立場にある人びとが、①事実として認めるか ②暗黙の前提としているばあい、③あるいは積極的に否定していないばあい、われわれはその事実を疑いえない事実として考えてもよい」と。

②③の原則に当てはめると、キリストの復活は、れっきとした事実であることがわかってくる。考えてもみると、もしキリストがよみがえっていないなら、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」(ヨハネ11:25)というイエスのことばは悪い冗談以外のなにものでもない。しかし、復活が事実であるなら、キリスト以外による救いはない、ということもまた事実である。神からその判断を迫られているのは、実は私たち一人ひとりなのである。